ダウィドとイブリー[1)]

三笠宮崇仁

はじめに
第1章　「ダウィド」ユダ族説批判
　1　「ダウィド」ユダ族説
　2　「ダウィド」ユダ族説批判
第2章　イブリーについて
　1　旧約聖書におけるイブリー
　2　イブリーとアピルー（ハビルー）
結　論　ダウィドとイブリー

略号表

創……創世記
出……出エジプト記
民……民数記
申……申命記
士……士師記
サム上（下）…サムエル記上（下）
歴上……歴代志上
　例：創，xvi，3f.……創世記第16章第3・4節。

ANET　Ancient Near Eastern Texts relating to the Old Testament, ed. by James B. Pritchard, Princeton, 1955.
ICC　The International Critical Commentary, Edinburgh.
LVTL　Koehler-Baumgartner, Lexicon in Veteris Testamenti Libros, Leiden, 1953.
LXX　B. C. 3〜2 世紀ころ，エジプトのアレクサンドリアでギリシア語に翻訳された旧約聖書，Septuaginta（七十人訳）。
RSV　Revised Standard Version (of the Bible), 1952.
SBB　Soncino Books of the Bible, The Soncino Press (London).

はじめに

ダウィド王国は，旧約聖書に述べられている士師時代[2]に，一方では伝統的な部族制社会内部の矛盾が増大して部族制度が解体しつつあると同時に，他方では新秩序の回復策として軍事的官僚制古代国家が形成される機運が生じつつあった過渡期に，これら両傾向が未完成のまま，ダウィドという偉大な一人格によりパーソナル・ユニオンの形で一応の結合をとげた国家といえよう。

本稿では従来定説化していた「ダウィド」ユダ族出身説に疑問を表明し，あわせて「ダウィド」とイブリーの関係を検討してみたいと思うのである。けだし，本問題を無視してはダウィド王国の実体を把握しがたいと考えるからである。

なお本稿は，1964年5月に行なわれた日本西洋史学会大会において発表した研究にさらに手を加えたものであることを諒承されたい。

第1章　「ダウィド」ユダ族説批判

1　「ダウィド」ユダ族説

まず「ダウィド」ユダ族説の代表的な実例をあげてみる。ヘースティングズの聖書事典には，ダウィドは「ベト＝レヘムびと。かれはユダ部族に属していた」とある[3]。ノートは，「ダウィドはユダ部族の中心地ベト＝レヘム出身のユダびとであった」と述べている[4]。日本でもこの説が受けつがれている[5]。

もっとも，すべての権威者がダウィドをユダ族と記しているわけではない。ブライトは，ダウィドを「ベト＝レヘムの若者」とだけ記している[6]。

次にこの「ダウィド」ユダ族説の出所を旧約聖書の記事より推測してみたい。

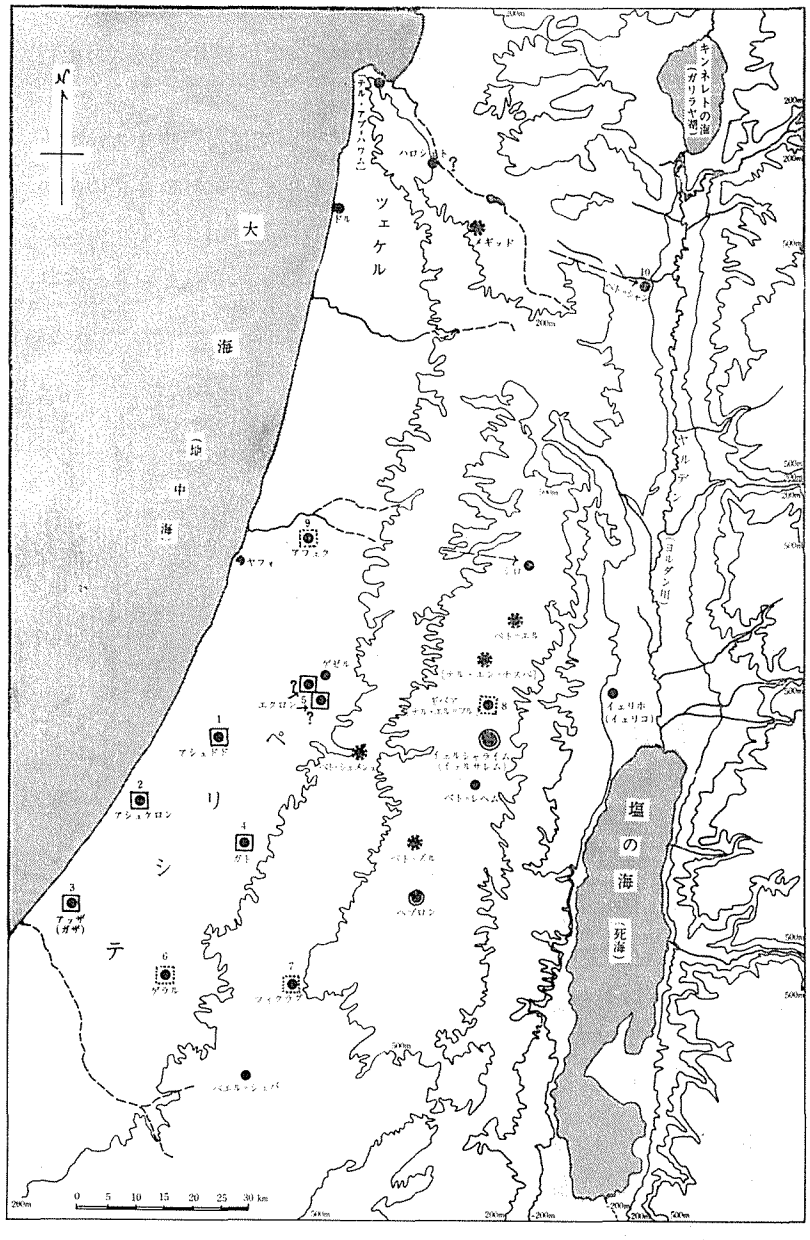
(1)　サム上，xvi，18 には，ダウィドを「ベト＝レヘムびとイシャイの子[7]」としている（M史料[8]）。

(2)　サム上，xvii，12 には，「さてダウィドは，ベト=レヘム・ユダの[9]，かのエフラタびと，その名はイシャイの子であった」とある（Z史料[10]，LXX にはない）。

(3)　サム上，xx，6 には，ダウィドがサウル王の不興を買い，一時身をかくす話がある。その際ダウィドは友人に次のように言わせている。すなわち，「ダウィドはかれの

ペリシテの勢力範囲

B. C. 12～11世紀



地名はヒブル音を用いた。

( ) 内は慣用音

〔 〕内は遺跡の現代名

◎ はペリシテの5主要都市

◉ はペリシテの居た町

参照文献

1. サム上, v (A史料) 1～5.

サム上, vi. 17 (A史料)

6. 創, xxvi, 1 (J史料)

7. サム上, xxvii, 6 (M史料)

8. サム上, xiii, 3 (M史料, ただし関根正雄訳による)

9. サム上, iv, 1 (A史料)

10. サム上, xxxi, 10 (M史料)

✱ はペリシテ土器の発見地

W. F. Albright, The Archaeology of Palestine, 1960, pp. 114—118 参照。

……

ドルには, ペリシテと同時代に侵入したツェケル (tkr) という海の民族が居たことが, エジプトのウェン・アメンの旅行記で知られる。 ANET, p. 26 参照。

……

シロはペリシテによって破壊されたと考えられている。

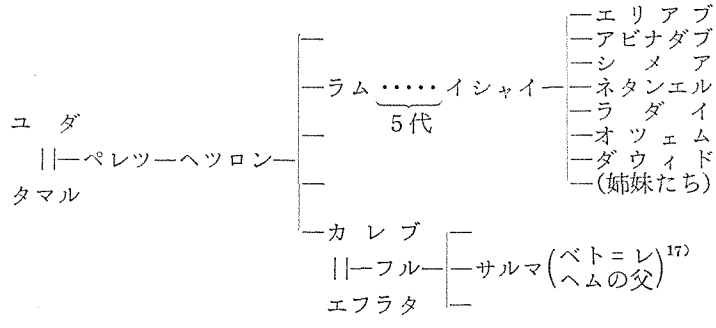
Albright, op. cit., p. 113 参照。

町[11]ベト＝レヘムに急ぐ許しを求めました。というのは，そこで年ごとの一族の「にえのまつり[12]があるからです」というのである（M史料）。

(4) 身をかくしたダウィドのありかをサウルに密告したものがいた。そのときのサウルの言葉を，サム上，xxiii, 23 は次のように伝えている。「もしもかれがこの地にいるのならば，わたしはかれをユダの数千の人びと，皆の中から[13]さがし出そう」（M史料中のできごとに関連ある一伝承[14]）。

(5) ダウィドと直接関係はないが，ベト＝レヘムとユダ族との関係を示唆するかのような記事が，士，xvii, 7 にある。それは，「ベト＝レヘム・ユダからきたユダのやから[15]の若者があり，かれはレウィびとでそこに寄留していたのである」と。

(6) 歴上，ii には，「ユダの子ら」の系図がダウィドと結ばれて記されている。それを図示すれば次の通りである[16]（直接関係ない部分は省略）。



以上の諸記事から得られる仮説は，

(イ) ダウィドの父はイシャイである……(1)

(ロ) イシャイはベト＝レヘムびと……（1，2）

(ハ) ベト＝レヘムはユダにある……（2，5）

(ニ) ベト＝レヘムはユダ族と関係がある……（5，6）

(ホ) 以上のことがらと，(3) および (4) とをあわせ考慮すれば，ダウィドもまたユダ族と関係がある，あるいはユダ族である，ということにもなろう。

2 「ダウィド」ユダ族説批判

前記の旧約の諸記事は史料史という観点からはいずれも重要な意義をもっているが，歴史学的史料という点においてはその価値に大きな差異がある。

まず (6) の歴代志の記事である。そもそも「歴代志はユダヤ教の歴史[18]」であり，そ

れを書いた一群の人たち，すなわち「歴代志記者（Chroniclers）は歴史家としては祭司記者（Priestly author）の弟子[19]」である。祭司記者というのは，ユダ王国滅亡（587 B. C.）に伴うバビロニア捕囚以後に現われた，おそらく祭司と思われる歴史記者をさす。したがってかれらの思想的影響をうけた歴代志は宗教史学的史料としての価値は高いが，一般的な歴史学的史料として用いる場合はよほど注意しなくてはならない。のみならず，本書は 350～250 B. C. の間に編集されたと一般に考えられているから[20]，ダウィド時代（B. C. 10 世紀前半）との間にはすでに 6～700 年を経過しており，歴代志の記事をもってただちにダウィド時代を推察することは危険だといわざるを得ない。クックも，歴代志はダウィド時代の研究史料としては「サムエル記や列王紀の平行記事より信頼性が薄い」と述べている[21]。

次に (5) の士師記の記事に移る。士師記はサウル以前のいわゆる士師時代の伝承をおさめているが，その主要部分を記述編集したのは「申命記的歴史記者（Deuteronomists[22]）」で，関根氏の言をかりれば，かれらには「単なる歴史を記述する考えは毛頭なく，専ら民を教化するという実際的目的を追求しているのであり，それ故学者は之を神学的プラグマティズムと呼んでいるのである。歴史はその説教の為の例示に過ぎない[23]。」現在の形における士師記の成立年代は 500～200 B. C. の間といわれるので[24]，これまたダウィド時代との間には数百年の隔たりがあり，ダウィド研究の史料としての価値は薄いといわねばなるまい[25]。

そうすると残るのはサムエル記である。しかし，サムエル記といっても各種の史料が混在しており，古いものはB. C. 10 世紀中期，中間のもので B. C. 7 世紀ころ，新しいものは捕囚以後の史料にわたっている。したがって本書の記事を利用する場合もまず史料分析を必要とする。

前記 (1) ～ (4) の中で，(2) は後代の挿入と考えられるばかりでなく，LXX にも載っていないから，本研究には利用しない方が安全である。そうなると，「ダウィド」ユダ族説と直接関係ある旧約聖書の記事は (1)，(3)，(4) になってしまう。それらを要約すれば，

(1)′ ダウィドはベト＝レヘムびとの子

(3)′ ダウィドの故郷はベト＝レヘム

(4)′ かくれているダウィドをユダの諸部族の中からさがし出す

ということになる。

これらのうちの (4)′ であるが，これはサムエル記の基本的な史料とはいえない。しかし一応参考史料の範囲に入れるとしても，この文章からはダウィドがユダ族に属してい

たという結論は下せない。属していることを拒否もしない代りに，肯定する根拠ともならない。荒野の民は自分たちに危害を加えない客人や旅人に対してはきわめて親切なのが常である。ことにこの場合はダウィドを追っているのが北部のイスラエル[26]の王サウルであり，南部の諸部族はサウルに対して好感をもっていなかったと思われるから，たとえダウィドが南部の諸部族（＝ユダの数千の人びと）と無縁の者であったとしても，かれをかくまうことを躊躇しなかったであろう。

こう考えてくると，(1) と (3) はもちろんのこと，(4) においてもダウィドをユダ族だと結論できるなにものもない。

なお，さきに除外した史料ではあるが，(2) と (5) にベト＝レヘム・ユダ[27]という名称が出てくる。これはユダ族という意味ではなく，地理的な名称である。すなわち，ベト＝レヘム（現代名は Beyt Laḥm）と呼ばれる場所が2箇所あり，ひとつはイェルサレム南方約 8 km に，他はメギッド北方約 15 km にあるので，前者をとくに「ユダのベト＝レヘム」と呼んだと思われる。RSV の訳者が "Bethlehem in Judah" と訳したのも，地域名としてのユダと解したからであろう。

以上のように，旧約聖書にはダウィドをユダ族出身とする決定的な記事がないように思われる。しかし，旧約時代の読者にとってはダウィドがユダ族出身だということがあまりにも明瞭だったので，わざわざ書く必要がなかったのだという反論が現われるかもしれないので，それにもあらかじめ答えておかねばなるまい。

旧約聖書を読むと，全般的に自他の祖先や部族名をきわめて重視する傾向が認められる。たとえば，サウル（原音はシャウル）の系図は次のように記されている。「ビン＝ヤミンびとの中にキシュという名の男がいた。キシュはアビエルの子，アビエルはツェロルの子，ツェロルはベコラトの子，ベコラトはアピアハの子，アピアハはビン＝ヤミンびとの名望家であった[28]。キシュにひとりの息子があり，その名をシャウルといった」（サム上，ix，1 f.，M 史料）。

ところがダウィドの場合は，後代の著作でこそあたかもアダムの子孫であるかのごとく系図を作為されている（歴上，i，1〜ii，9）が，サムエル記の早期史料ではベト＝レヘムびとイシャイの子としか記されていない。これは旧約の他の例に比べてみてむしろ異例に属し，ダウィドが由緒ある家柄や部族の出身でないことを示していると思う。

第2章　イブリーについて

1　旧約聖書におけるイブリー

第1章において，旧約聖書にはダウィドがユダ族出身だという証拠がみあたらないことを述べた。次の問題は，それではかれはいかなる出身であったか，ということになる。筆者はその解答をやはり旧約の伝承からひき出してみたい。

さて，ダウィドがサウルのもとをのがれ，ペリシテの5都市[29]のひとつであるガトの王マオクの子，アキシュのもとに部下600人をひきつれて亡命したときの物語である。

ペリシテ軍とイスラエル軍とが対陣したとき，ダウィドとかれの部下はアキシュとともに戦列に加わっていた。その際「ペリシテの将軍たちが言うには，『これらのイブリーたちは何者だ。』アキシュがペリシテの将軍たちに答えた。『これはイスラエルの王サウルの部下のダウィドではないか。かれは，この日ごろ，この年ごろ，わたしのところにいたが，逃げ落ちてきた日から今日まで，かれについて欠けた点を見たことがない。』」(サム上，xxix，3，M 史料)。

この記事でとくに注目すべきは，ダウィドとその部下がイブリーと呼ばれていることである。旧約中唯一の例にすぎないが，たとえ1例にせよ，長年月にわたる意識的・無意識的の淘汰をまぬかれて今日まで伝わってきたこと，ことにそれが旧約中もっとも重要な人物であるダウィドに関していることを考えれば，これは重要な事実といわねばならない。しかしながら，これだけでダウィドをイブリーだと断定することは軽卒のそしりをまぬかれまい。そこで旧約中に現われるイブリーの他の例を参照してみたい。

旧約中にはイブリーということばが34回用いられている[30]。サム上，iv，5f. には，「全イスラエルは歓声をあげ，大地は鳴った。ペリシテびとはその叫び声を聞いて，『イブリーたちの陣営のあの大きな叫び声は何だろう』と言った[31]。」と記してある。この例によれば，ペリシテびとがイスラエルびとのことをイブリーと呼んでいるようにみえる。従来，イスラエルは自称，イブリーは他称であるという説があったが[32]，こういう例からひき出されたのであろう。

しかし，さきに引用したサム上，xxix，3 でも，アキシュはサウルのことを「イスラエルの王」と呼んでおり，「イブリーの王」とは言っていない。さらにサム上，xiv，21（M史料）には，「それまでペリシテびとについていて，かれらと一緒に出陣していたイブリーたちも，そのときかれらにそむいて，サウルとヨナタンと共にいるイスラエル軍についた」という記事があるから，イブリーとイスラエルとが同義語であるとはいえ

ない。

つまり，イブリーという集団があって，あるときはペリシテ側に，またあるときはイスラエル側について戦ったと解するのが穏当ではなかろうか。日本でいえば，かれらは野武士的な集団で，固定化した部族組織の枠外にあって比較的自由に行動できたものといえよう。

ここで旧約全般からみたイブリーの性格を類別してみよう。

第1カテゴリー： 傭兵として現われる場合で，サムエル記上にある。そのうち xiii, 19 は後代の附加かと思われるが，その他（iv, 6, 9〔A〕; xiii, 3, 7〔M〕; xiv, 11, 21〔M〕; xxix, 3〔M〕）の7例はいずれも B.C. 10 世紀後半の史料である。

第2カテゴリー： いわゆる族長と結びつけている場合で，創世記にある。アブラムをイブリーとしている xiv, 13 は特殊な史料なので一応保留すると，他はすべて奴隷に売られてエジプトに下ったヨセフに関するものである（xxxix, 14, 17; xl, 15; xli, 12; xliii, 32)。ヤハウィスト〔J〕もしくはエロヒスト〔E〕史料に属する[33]。なおその中に1例だけではあるが「イブリーの地」(xl, 15) というのがある。

第3カテゴリー： モーセと結びつけている場合で，出エジプト記にある。単にイブリーの一般男女について述べている場合（i, 15 f., 19, 22; ii, 6 f., 11, 13〔J または E〕）のほか，とくに「イブリーびとの神，ヤハウェ」[34]という用法（iii, 18; vii, 16; ix, 1, 13; x, 3。〔J または E〕）がみられるのは注目に価する。

第4カテゴリー： 奴隷として現われる場合である。そしてイブリーの奴隷で6年仕えたものは，第7年目に解放すべきことを定めている（出，xxi, 2〔E〕; 申，xv, 12; エレミヤ記，xxxiv, 9, 14)。

特例：ヨナ書に，「わたしはイブリーです。わたしは海と陸とを造った天の神ヤハウェをおそれる」(i, 9) という記述がある。

以上を要約すれば，

(1) 傭　兵

(2) ヨセフと関連
(3) モーセと関連
} 両者ともエジプトを物語の背景とし，強制労働者または奴隷である

(4) 奴隷およびその解放の規定

の4種に区分されるが，さらにつきつめると，結局，傭兵と奴隷の二点にしぼられてくる。

これら4種のうち，(4) は申命記的色彩が強いので一応除外する。他の (1), (2), (3) を

比較すると，(1) は伝承の内容と伝承の成立年代とがもっとも近接（せいぜい1世紀）しているのに対し，(2)，(3) はその間に数世紀の隔たりがあることに注意せねばならない。そう考えると，これらの史料中もっとも信頼度の高いのはイブリーを傭兵として記述しているものといえよう。そして次には奴隷としてのイブリーが，かれらの放浪性の印象とともに，人びとの記憶の中に止まっていたことに注意すべきであろう。

ここでイブリーの語義および語源を一応顧みておきたい。*'bry* が動詞 *'br* と関連していることはまちがいあるまい。この動詞は「進み行く」，「越えて行く」などの意味をもつ[35]。創，xiv，13 の「イブリー（であるアブラム）」ということばは古来多くの論議の的となっている。LXX はこれを *ho perátēs* と訳しており，「向う側に渡るもの」，あるいは「(一地から一地へ) 移動するもの」などの意に解されている。ユダヤ人のラビ（律法学者）たちの間でもいろいろと論ぜられたが，「川（エウフラテス）の向う側から来たもの」という解釈が優勢であったといわれる[36]。

しかし，この *'br* を強いて川と結びつける必要はあるまい。「放浪者」，もしくは「旅行者」も含み得るはずである[37]。オルブライトは最近イブリーは元来「ロバによる隊商の長」を意味したのだと発表している[38]。この説を読んで思い出すのは，エジプトのベニ・ハサンにある B. C. 19 世紀の壁画で，そこにはイブシェという隊長以下 37 人のアジア人（おそらくセム人）の隊商がロバの背に商品を積んで到着した図が描かれている[39]。これを旧約中に求めれば，ヨセフをエジプトに連行したイシマエルびとの隊商の物語がある（創，xxxvii，25-28，J・E）。

以上のようにイブリーが隊商としてカナアンとエジプトの間を往来した可能性は十分に認められよう。しかし，すくなくともサムエル記に現われるイブリーにはそんな牧歌的な要素はみあたらないと思う。

2　イブリーとアピルー（ハビルー）

エジプトとカナアンとが古くから密接な関係をもっていたことを伝承は伝えているので，エジプトの記録に現われるアピルー（*'pr*〔*w*〕）に話題を移すことにする。

ラアメス2世（B. C. 13 世紀）時代の史料に，「軍の兵士たち，およびラアメスの〔宮殿？〕の大塔門用の石（？）を曳くアピルーに穀類を支給せよ[40]」とあるが，これは出，i，11（J）の，「そこでエジプトびとはかれら[41]の上に監督をおき，重い労役をもってかれらを苦しめた。かれらはエジプト王のために倉庫の町ピトムとラアメセスを建てた」という記事を想起させる。

次に，ラアメス3世（B. C. 12世紀前半）がアジア遠征の結果獲得した捕虜をヘリオポリスの神殿に寄進したリストがあるが，それには，「兵士たち，（外国の）諸王の子弟たち，マルヤンヌ[42]，アピルー，およびこの地方への移住者：2,093人[43]」と記されている。

またラアメス4世（B. C. 12世紀前半）がワディ・ハンママトの石切場に派遣した人員のリストには，兵士5,000人，王の神殿に所属する者2,000人とともに，「800人のアピルーの射手[44]」が載っている。

上記のアピルーがカナアン地方から連行されたであろうことは，他のエジプト王の記録から想像される[45]。

次にはさらに広く眼を古代オリエント地方全般に向けてみよう。するとそこには，メソポタミア，シリア，アナトリア方面から出土した楔形文字の粘土板記録に現われてくるハビルー（ハピルー）という人（びと）が存在していた。この *ḫab/piru* と，別な楔形文字の SA·GAZ（発音はまだ議論がある）で表わされる人（びと），さらにウガリト（現代名ラス・シャムラ）文書の *'prm* が，エジプト文書の *'pr.(w)* と性格的に同一内容の人（びと）をさしていたことは，近年学界で承認されるに至っている[46]。

これらの人たち，すなわちアピルーとかハビルーとか呼ばれた人たちは記録上から下記のごとき性格を備えていたことがうかがわれる[47]。

(イ) いわゆる「よそもの」

(ロ) 奴　隷（みずから身を売る場合がある）

(ハ) 私人の奉公人

(ニ) 支配者の家臣

(ホ) 傭　兵

(ヘ) 独立した集団（「ハビルーの神」をもっている場合もある）

こうしてみると，アピルー/ハビルーと旧約のイブリーとの類似が目につく。グリーンベルクは両者の同一視に懐疑的であるが[48]，ミークは以前から両者をまったく同一視しており，ハビルーを躊躇なくイブリー（ヒブルー）と飜訳していた。そしてグリーンベルクの著書を読んだ後も初志を変更しないと述べている[49]。

筆者はミークほどに両者を全面的に同一視する勇気はないが，やはり両者は同一のカテゴリーに入れてさしつかえない人びとだと考える。しかも，ある時機と地点においては，同一集団がヒブル語ではイブリーと呼ばれ，エジプト語ではアピルーと呼ばれたという可能性も認められると考える。

結論　ダウィドとイブリー

前章においては，古代オリエント全地方に出没したハビルー/アピルーを媒介としてイブリーの性格を類推してみた。ここでは話を再びダウィドにもどし，ダウィドとイブリーの関係を吟味してみたい。

グリーンベルクは次のように述べている。「われわれは，ハビルー/アピルーが冒険的な行為をなすとき，地方の王たちと緊密に提携していたことを見いだす。全住民はエジプト[50]の官憲に反抗するためかれらの戦列に参加した。若干の例ではかれらは都市を与えられており，かれらはその中に明らかに他の住民とともに住んでいる。多くの場合，かれらを恐れているのはかれらの敵ではなく，かれらを部下にもつ支配者たちである。独立したハビルー/アピルー集団の目標は……掠奪の戦利品にある[51]。」

グリーンベルクのこの記述を読んで，筆者はすぐにダウィドとペリシテのことを連想したのである。「冒険的行為をなすとき地方の王たちと緊密に提携した」ということはダウィドがペリシテの王に強く依存したことを想起させるし，「都市を与えられる」例としてはダウィドにツィクラグの町が与えられたことが該当する（サム上，xxvii，6，〔M〕）。

また「アピルーを部下にもつ支配者たちがかれらを恐れた」ことは，ペリシテびとの将軍たちがアキシュに，「この男（ダウィド）を帰らせて……われわれと一緒に出陣させてはならない。戦争の最中にわれわれを裏切らないとも限らない」と言ったのとよく似ている（サム上，xxix，4，〔M〕）。

さらにまた「掠奪の戦利品」については，「ダウィドとその部下たちは出ていってゲシュルびと，ギルジびと，アマレクびとに対する掠奪を事としていた。……ダウィドはこれらの地方を荒らして，男女を問わず，一人も残さず，羊，牛，ロバ，ラクダ，および衣服を奪い，再びアキシュのもとに帰るのが常であった」という記事に符号する（サム上，xxvii，8 ff.，〔M〕）。

さて，ダウィドの行動をハビルー的だとみる説は従来より存在する[52]。それはダウィドがサウルのもとをのがれてから，「ダウィドのもとには，すべての落ちぶれた男や，借財で首の廻らない者，世の不平家達がみな集った。ダウィドはみずからかれらの隊長となった。およそ400人の者が，かれと事を共にした」（サム上，xxii，2，〔M〕，関根正雄訳）という記事を根拠にしている。この観察は正しいと思う。つまり，ダウィドが

ハビルー的行動をした，あるいはその隊長であったことがあるという点はすでに学界の権威者の認めるところなのである。ただ従来はその時機をかれがサウルのもとを逃れてからと考えられていたようであるが，筆者はもっと前からではないかと思う。それを旧約の記事から回想してみたい。

その第1は，ダウィドがイスラエル王サウルに仕えたという行為である。当時の南部と北部の対立意識はわれわれの想像以上に根強かったと思われる。この両者の統一はダウィドによってはじめて完成した。しかしそれもつかの間，ダウィドの子ソロモン王が没するとたちまち王国は南北に分裂した。そしてこの両者の反目はずっと後のイエス時代まで続いたのである。旧約聖書の記事には，すでにダウィド以前から南北の諸部族が結合していたようにとれる部分もあるが，これらの記事の多くはダウィドの死後，ダウィド王国時代の南北統一のありさまを心の底にとどめている人たちが，ダウィド以前より伝わる口頭伝承を筆にしたものであることに注意しなければならない。

こう考えてくると，ダウィドがもし南部の重要な部族組織の出身であったとしたならば，自己の部族組織から脱出し，こともあろうに敵方とさえいえるサウルのもとに仕えるということは容易にできなかったと思われる。しかも後に，いかに情勢の変化とはいえ，かつては自己の部族を捨ててまでイスラエル王の隊長になったダウィドにたいし，ユダの長老たちが頭をさげて王位に即くことを懇請するであろうか（サム下，ii，4，〔M〕）。

ダウィドがユダ族と関係を結んだのは，サム上，xxx, 26〔M〕が述べているように，ダウィドがペリシテ王に仕えていた間に掠奪を行ない，その「分捕物の中から，ユダの長老たちにその町々に従い，贈り物を送って」よしみを結んだのを最初とするように考える。

さらにひとつ，サウルとダウィドの軍制の相違をあげておきたい。ウェーバーの言をかりれば，サウルは「その勢力の基礎として，自分の氏族（Sippe）をもっているばかりでなく，部族（Stamm）ビン＝ヤミンの戦士団（Kriegsmannschaft）を背後にもっており，もっとも重要な官職はビン＝ヤミン出身者をあてた[53]」のである。これに対してダウィドの方は，「純個人的従士階級（rein persönliche Gefolgschaft）」[54]に依存していたのである。

そしてかれが南北を統一した後，王都としたのはイェルサレムである。ここはエブスびとの町であったのを占領したのである。ヘブロンでは南に過ぎるので，王国のほぼ中央に移したとみられるが，それにもましてイェルサレムが北の部族組織——宗教史的に

みれば宗教連合——にも，南のそれにも属さない，いわば第三者的な町であったからではあるまいか。そしてダウィドはイェルサレムのツィヨン（慣用シオン）の丘に親衛隊を駐屯させ，ここを「ダウィドの町」と名づけ，そこから全国を支配したのである（サム下，v，6-9，〔M〕）。そこには，伝統的な部族組織に拘束されないで新しい道に突き進もうとするダウィドの姿がみられる。それはダウィドに野心的な情熱と意欲があったということ以外に，かれにそういう行動をとることを可能にしたいわば先天的条件があったにちがいない。その条件こそ，かれが生来，南北の部族組織外の人間だったからだと考える。

このような推論の過程で頭に浮かぶのはイブリーにほかならない。そして旧約の伝承によれば，かれがイブリーと呼ばれているのも事実である。

ただし，かれが生れつきイブリーだったかどうかという点になると，筆者の研究はまだそこまで進んではいない。この問題の最後的解決のためにはまだまだ多くの未解決な問題と取り組まねばならないからである。

本稿の結論としては，次の2点をあげたい。

第1　ダウィドは，ダウィド王国において重要な地位を占めたユダ部族の出身とは考えられない。（本稿の主要テーマ）

第2　ダウィドは，古代オリエント地方全域に現われたハビルー/アピルーと性格的に同一カテゴリーに属するイブリーの出身であった。（将来の研究に対する問題提起）

註

1) *'bry*. Hebrew と英訳されている。

2) 三笠宮崇仁，“イスラエル英雄時代の一考察”（岩間徹編，「変革期の社会」所載），御茶の水書房，1962，pp. 1—32 参照。

3) Dictionary of the Bible, ed. by J. Hastings, rev. by F. C. Grant & H. H. Rowley, Charles Scribner's Sons (New York), 1963, p. 201.

4) Martin Noth, Geschichte Israels, Vandenhoeck & Ruprecht (Göttingen), 1963 (5. unveränderte Auflage), SS. 165f.

5) 石井良博，古代政治思想史論考，慶応義塾大学法学研究会，1959，p. 10.

6) John Bright, A History of Israel, SCM Press Ltd. (London), 1960, p. 171.

7) *bn lyšy byt hlḥmy*. *byt hlḥmy* という表現法については Gesenius' Hebrew Grammar, ed. by E. Kautzch, Oxford, 1910 (2nd Eng. ed.), § 127, (c), 2 参照。

8) サムエル記の骨幹をなす二大史料を便宜上，「早期史料」および「後期史料」と名づけると，前者は至って素朴で，神学的な修飾がないのに反し，後者はきわめて神学的・論理的で，ヤハウェ神権主義で貫かれている。その成立年代は，前者が B. C. 10 世紀後半，後者はユダ王国末期からバビロニア捕囚期にかけての時代と考えられている。M史料というのは，早期史料の主体をなしている史料にケネディが附けた符号で，その成立は 920 B. C. ころとしている（下記の同氏の著書による）。

サムエル記の史料分析の細部については下記著作参照。

Henry preserved Smith, The Books of Samuel (ICC), 1951(4th Impr.).

A. R. S. Kennedy, Samuel (The Century Bible).

Adam C. Welch, Kings and Prophets of Israel, Lutterworth Press (London), 1955 (3rd Impr.).

George B. Caired, "Introduction to the I and II Samuel," in The Interpreter's Bible, Abingdon Press (New York), Vol. 2, pp. 856–875.

S. R. Driver, Notes on the Hebrew Text and the Topography of the Books of Samuel, Clarendon Press (Oxford), 1913.

関根正雄訳，サムエル記，岩波文庫，1957, pp. 185–229.

9) *byt lḥm yhwdh.*

10) ケネディによれば，「雑多な起源と成立年代をもつ史料で，サムエル記の最初の編集の際には含まれていなかったと信ずる理由がある」（前掲書）。

11) 故郷の意。

12) *zbḥ ḥymym lkl-hmšpḥh.* *zbḥ*（犠牲を供える祭儀）については LVTL, p. 249 参照。

13) *bkl 'lpy yhwdh.* LVTL, p. 57 参照。関根氏は「ユダのあらゆる部族」と訳している（前掲書，p. 81）。

14) ケネディは T 史料としている（前掲書）。

15) *mšpḥt yhwdh.*

16) 民，xxvi, 19（祭司史料——註 (33) 参照）にも「ユダの子ら」の名があがっている。ルツ記，iv にも本系図のペレツからダウィドに至る部分が引用されている。両者とも捕囚以後の記述である。

17) 歴上，ii, 51 には「ベト＝レヘムの父サルマ」とある。この「父」とは，「町の長」(I. W. Slotki, Chronicles 〔SBB〕, pp. 14f.)，もしくは「町の創建者」の意味にも解される。

18) Robert H. Pfeiffer, Introduction to the Old Testament, Harper & Brothers

Publishers (New York), 1948, p. 782.

19) ibid., p. 786.

20) ibid., p. 811.

21) S. A. Cook, in The Cambridge Ancient History, Vol. III, p. 355.

22) 関根正雄，旧約聖書，創元社，1963 (14版)，p. 210 参照。

23) 同上，p. 216。

24) Pfeiffer, op. cit., p. 336.

25) もっとも，ムーアは本例の士，xvii は申命記的歴史記者の記述ではなく，最後的編集者が前者の採用しなかった古い物語を書きたしたものだとしている (George F. Moore, Judges [ICC], p. xxxv)。そういう意味では，本章は申命記思想の加わらないオリジナルなものだともいえるが，シンプソンは，本章7節の「ユダのやからのレウィびと」というのは歴史的にみてあり得ないとし，前後関係から「ダンのやから」と読みかえるべきだとしている (C. A. Simpson, Composition of the Book of Judges, Oxford, 1958, pp. 63, 67)。

26) イスラエルという名称はエジプト王メルエンプタハ (B. C. 13 世紀後半) の戦勝記念碑にはじめて現われるが，その内容はわからない。本稿が対象にしているサウル時代では，イェルサレムの北側にあるエフライム高地帯およびその周辺にいた諸部族の連合体をさすものと筆者は考えている。

27) 士，xvii, 7ff.；xix, 1f., 18；サム上，xvii, 12；ルツ記，i, 1f. にもこの名称が現われる。

28) 三笠宮崇仁，“ダウィド王権の形成過程とその性格”（オリエント，Vol. 5, No. 2, 所載)，日本オリエント学会，1962, pp. 30f. 参照。

29) *pl ty*. エジプトの記録では *prst*. B. C. 12 世紀に東部地中海を東進してカナアン（パレスティナ）地方に侵入した民族。かれらの占拠した主要な5都市は，アシドド，ガザ，アシュケロン，ガト，エクロンであった（サム上，vi, 17 参照)。

30) 創：6例；出：14例；申：2例；サム上：8例；エレミヤ記：3例；ヨナ書：1例。

31) ケネディによるA史料で，B. C. 10 世紀後半とされている（前掲書)。

32) The Books of Samuel (ICC), pp. 34, 92 参照。関根正雄，サムエル記，p. 188.

33) 創，出，レウィ記，民，申の5書（いわゆるモーセの5書；ヒブル語ではトーラー）を構成する史料を大別すると，ヤハウィスト史料 (B. C. 10～9世紀)，エロヒスト史料 (B. C. 8世紀)，申命記史料 (B. C. [8末～] 7世紀)，祭司史料 (B. C. 6～5 [～3] 世紀) の四種となる。

34) *yhwh 'lhy 'brym*.

35) LVTL, p. 675.

36) Moshe Greenberg, The Ḫab/piru, American Oriental Society (New Haven), 1955, p. 5, n. 24 参照。

37) LVTL, p. 678.

38) William F. Albright, "Recent Advances in Palestinian Archaeology," in Expedition, Vol. 5, No. 1, Univ. Museum of the Univ. of Pennsylvania, 1962, p. 8.

39) フィネガン著，三笠宮・赤司・中沢訳，古代文化の光，岩波書店，1955, pp. 99; Fig. 30.

40) Greenberg, op. cit., pp. 56f. (Nos. 162f.).

41) この「かれら」は9節の「イスラエルの子ら」をうけていて，イブリーではない。そして，15節からは文章が一変してモーセの話となり，ずっとイブリーが出てくる。したがって，出，i，1—14 は創世記の末尾との連接をよくするための挿入のようにも思えるが，この場合の「イスラエルの子ら」とイブリーとの内容的関係は本稿で検討するいとまがないので，後日の問題としたい。

42) *maryannu*. 馬の曳く兵車で戦う軍人で，インド・イラン人（アーリア人）が支配したミタンニ王国の支柱ともいうべき貴族階級を形成していた。

43) Greenberg, op. cit., p. 57 (No. 164); ANET, p. 261.

44) ibid., (No. 165).

45) アメンホテプ2世（B. C. 15世紀後半）の碑文。これにはアピルー3,600人と出ている（J. Bottéro, Le Problème des Ḫabiru, Paris, 1954, p. 167. ; ANET, p. 247)。セティ1世（B. C. 13世紀初期）の碑文。(Greenberg, op. cit., p. 56〔No. 160〕; ANET, p. 255)。

46) Greenberg, op. cit., pp. 3–12, 85–91; 神保規一，"Ḫabiru をめぐる名前について"，東京経大学会誌，第29・30合併号所載，東京経済大学，1960, pp. 523–543 参照。

47) Greenberg, op. cit., pp. 15–57 には166例を載せている。

48) ibid., pp. 91–96.

49) T. J. Meek, Hebrew Origins, Harper & Brothers (New York), 1960, p. viii.

50) これはエジプトの史料を用いて論じているので「エジプトの官憲」となっているが，一般的な支配者と考えてもよかろう。

51) Greenberg, op. cit., pp. 95.

52) Bright, op. cit., pp. 172f. "David pursued a precarious existence as a bandit chief (a khapiru)."

53) M. ウェーバー著，内田芳明訳，古代ユダヤ教，みすず書房，1962, p. 83.

54) 同上。